

『江戸のコレラ騒動』

2009年の新型インフルエンザの流行以来、西宮市医師会では、新たな感染症のパンデミックへの対応を検討してきました。ところが、私にはパンデミックの意味がよく理解できなかったのです。

13世紀の黒死病や20世紀のスペインかぜは本の知識だけで、実感としては全くわからなかったのです。今回、新型コロナウイルスの世界的な流行でやっと、パンデミックとはこういうことだったのかと理解できました。遅きに失すとはこのことです。

パンデミックを調べていくうちに、江戸時代にコレラ騒動があったことを初めて知りました。160年前の江戸時代に即死病と恐れられたコレラが大流行したのです。当時の人達はどのように対処したのでしょうか。

コレラは本来遠くインドのインダス川流域のベンガル地方に潜む風土病でした。イギリスの植民地化にはじまる欧米列強のアジア・アフリカ侵略の歴史と共に世界に拡散して、19世紀には、五次にわたる大流行をくり返しました。第三次の流行が嘉永七年(1854年)に日本を直撃しました。5月、長崎に寄港した米艦ミシシッピーの乗員から伝染し広まったため、鎖国の開放と相まって異人に対する恐怖心が増幅されました。

コレラの脅威は死亡率の高さ、感染から死に至る迅速さ、症状の異様さにありました。長崎から東進を続けたコレラは東海道から江戸に迫っていました。駿河国(静岡)では、7月から突如気分が悪くなり嘔吐して、手足が痙攣して、あっという間に黒く干からびて即死する前代未聞の変病に襲われていました。また東海道筋の松原では、乞食や雲助が行き倒れたまま放置され悪臭が鼻を突く、おどろおどろしい状況になっていました。

そのうち熱に浮かされ、思わず奇異なことを口走ったことから、狐憑き、しかも人体に浸入する「くだ狐」のせいではないかと妄想が広がって行きました。コレラはかつて経験したことのない「異人」が持ち込んだ大災厄と考えられ、災厄よけで立ち去ってもらうしかないとして、村や町の共同体は神社仏閣への祈願や狐落とし等、ありとあらゆる除災儀礼を動員して悪疫退散に立ち上がりました。8月には、江戸にも広がり、葬礼の棺の行列が続々と続き、数万の寺院は門前市をなして、焼き場には棺がうずたかく積まれたままで死臭が充満していたとのことです。

人々は三種の神器、厄除けの八ツ手の葉・魔除けのみもすそ川の歌・厄除けのにんにくの黒焼きを門戸に張ってコレラから何とか逃れようとしていました。

ここで怯まないのが江戸っ子の意気で、川柳や駄洒落でコレラを笑い飛ばしているのです。そこにあるのは、死者の悲惨さを乗り越えて生き残った人々の突然の災厄を乗り越えていく図太さと尽きないエネルギーではないでしょうか。

突如襲いかかった大災害に対し、無力な文明に頼らず、ありとあらゆるものを総動員して立ち向かった人々のたくましさを感じます。

